

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈3月21日（金）放送分〉

テーマ「奄美群島12市町村の伝説・昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第3金曜日にお届けしている、奄美の伝説や昔話などを紹介する「奄美群島12市町村」シリーズの第12回、和泊町の昔話「塩一升クレー（塩一升の運命）」です。

昔、東長者と西長者がいました。

ある夏の夜、西長者の主人が、近くの海に漁に出かけましたが、潮時が少し早かったので、流木を枕にして仮眠をしていました。

しばらくすると、沖の方から竜宮の神様が来て、「流木、流木、今日は村に子どもが生まれたので、運命（クレー）を決めにいかねばならぬが、一緒に行かないか。」と尋ねました。流木は、「自分も行きたいが、人間に枕にされているので動けません。あなただけで運命を決めてきてください。そして帰りにまたここへ来て、その報告をしてくださいませんか。」と神様に言いました。

しばらくすると、神様が流木のところに来て、「流木や、女の子には塩一升の運命を、男の子には竹一本の運命をつけたよ。」と言いました。

この話を聞いていた西長者の主人は、急いで家に帰りました。

家に着くと、男の子が生まれていました。主人はかなり落胆しましたが、浜で聞いたことは一切口外せずに、子どもの成長を見守っていました。

月日の経つのは早いもので、東長者の子どもと西長者の子どもは、年頃の娘と青年に成長しました。

西長者は、この二人を夫婦にしたいと思い、いろいろと働きかけると、二人とも結婚を承諾して、夫婦として生活するようになりました。

西長者の家は、塩一升の運命をもつ娘を嫁にもらったので、毎日お金が家に入ってきて、またたく間にお金持ちになりました。

さて、二月の種まきを祝う日のことでした。麦の種をまいた夜のお祝いには、麦飯を食べることになっていました。

西長者の家のお嫁さんは、作った麦飯をお盆にのせて、夫の前に持っていきました。すると夫は妻に、「私ほどのお金持ちである主人に向かって、麦飯を食べろとは何事だ、この不届き者が。」と言って、お盆をけとばしてしまいました。そして、「お前のような女は、今日限りだ、この家から出て行け。」とどなりました。

妻は仕方がないので、お盆を持ったまま、高倉の下で泣いていました。

じつはそのとき、高倉の中でも騒動が起こっていました。泣いていた彼女が耳をすましてよく聞くと、麦の妖精が、「私はもうここにいることはできません。今晚限りでこの家を出て行かねばなりません。」と言い、米と粟の妖精たちが、「お姉ちゃん一人では行かせない。僕たちもついて行く。」と言って、出て行く準備をしていたのです。

やがて、麦と米と粟の妖精たちは、牛に俵をくくりつけて、家を出て行き、彼女もお盆だけを持って、泣きながらついて行きました。

やがて妖精たちは、炭焼五郎というとても貧乏な男の家に着きました。

彼女は炭焼五郎に、「私は遠いところからきた者です。今日からあなたの妻になって、この家で暮らしたいので、ぜひ私をお嫁にしてください。」と言いました。五郎は、「そ

れはありがたいことだが、私の家はごらんのとおり貧しい家です。あなたのような上品な方を住まわせるわけにはいきません。どうぞ他の家に行ってください。」と言って断りましたが、彼女の決心が固く、何度も頼み込むので、五郎は彼女を妻にしました。

塩一升の運命をもつ彼女を妻にしたので、炭焼五郎の家も日に日に栄えてお金もたまり、やがて五郎もお金持ちになりました。

いっぽう、西長者の若い主人は、妻を家から追い出した後、道楽遊びばかりしていたので、家の財産も手放して、毎日竹かごを売り歩くような落ちぶれた生活をしていました。

ある日、若い主人が竹かごをかついで、炭焼五郎の家にやって来て、竹かごを買ってくれと頼みました。すると妻が出てきて、「私の家は使用人が多いので、竹かごはいくらでも必要です。全部売ってください。」と言って残らず買い取りました。

五郎の妻は、竹かごを売りに来る人が、前の主人であることに気付いていたので、前の主人が家に来るたびに、竹かごを全部買い取っていました。

しかし、前の主人である西長者の若主人は、そのことに全く気付いていませんでした。

ある日、炭焼五郎の留守中に、また前の主人が竹かごを売りに来ました。五郎の妻は前の主人を座敷に通して、「遠いところからたびたびいらっしゃるので、今日はごちそうをして差し上げましょう。」と言って、海や山の珍味を座敷に運びました。

前の主人は、ご飯のおかわりをするときに差し出されたお盆を見て、「ああ、このお盆は私がけとばしたあのときのお盆だ。つまり、この女性は私があるとき家から追い出した妻だったのだ…」と悟りました。

前の主人は、恥ずかしさのあまり、妻がおかわりをもってくる間に、自分の舌をかみ切って死んでしまいました。

死んでしまった前の主人を見た妻は、悲しく哀れな気持ちになり、高倉の柱と柱の間に穴を掘り、「あなたはここにいて、高倉に来るネズミの番をしてください。」と言って前の主人を葬りました。

その後、五郎の妻は、毎晩みんなが寝静まった^{ひとけ}人気のない頃を見計らって、前の主人の魂を^{とむら}吊りました。

このことから、高倉の^{あんたい}安泰を祈る倉祭りは、人気の絶えた夜中にするようになったそうです。

さて、今回のお話はいかがでしたか。自分を追い出した本人であることに気付きながら、いつも竹かごを全部買い取ってあげる元妻の気持ち。やがてその事実気付いてしまい、自ら命を絶った元夫。幸せだったはずの若い夫婦が一膳の麦飯によってすれ違い、一膳のご飯によって再び交わるとき、そこには哀しい結末が待ち構えていました。

このように奄美図書館には、郷土に伝わる昔話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。

奄美群島12市町村の伝説・昔話をご紹介してきたこのコーナーも今回で最終回となりました。ラジオをお聞きのリスナーの皆さん、一年間ありがとうございました。また、4月から新しいコーナーでお耳にかかりましょう。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。